図画工作部会

県研究主題 豊かに感じ取る力を育てることを重視し、児童一人ひとりの資質や能力の育成を図る学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　笹嶺　由香（相模原地区）

＜研究主題＞ 友だちとつながり合いながら広がる想像力 ～ちぎった！ちぎれた！紙からみたてる活動を通して～

１　提案内容

（１）　研究のねらい

児童が材料と向き合い、それぞれの感性で造形活動を楽しむ姿、子ども達が自らの想いで「もっとつくりたい」「今度はこうしてみよう」と活動を広げていく姿をねらいとした。

（２）　研究の仮説

材料と活動の限定（造形遊びの要素を取り入れた活動）→想像力をはたらかせる姿 ⇒ グループ活動→対話しながら想像力を広げる姿 ⇒ コミュニケーション能力・表現する喜び

（３）　研究の実践

①　題材名　「かたち　はっけん！！　みんなの　なかよしランド」

第２学年　A 表現（２）絵に表す　B 鑑賞

②　題材の目標

○ちぎった紙の偶然の形を何かに見立て、そこから想像力を膨らませ、表現する。

○グループでの共同活動を通して、友だちの作品の工夫や見立てのおもしろさを味わう。

③　検証実践

材料・活動の限定について

無作為にちぎった紙の形からイメージをふくらませる。さらに組み合わせたりクレパスで描き加えたりすることで表現が広がる。

グループ活動について

友だちの表現の工夫に気づき、アドバイスなどの活動を促す。

（４）　研究の成果と課題

成果・画用紙を無作為にちぎることで、共通事項の「形」を基にイメージをもつ活動が展開できた。

・「折らない」「ちぎらない」などの約束から、発想力・想像力を生かし見立てる活動ができた。

・グループ活動を取り入れ、つくるだけでなく、鑑賞そのものを楽しんでいる様子が見られ、思いついたイメージを進んで相手に伝えることができていた。

・共同作業によって意欲が高まり、活動が進んだ。

・大きな作品を作り上げた満足感を得られた。

課題・なかなか形の見立てができない子や自分の考えがグループに反映されず、満足な活動ができない子がいた。

・約束の徹底ができず、教師の想定外の活動をどの程度認めるか、判断に悩んだ。
・グループでの取り組みから、個々を見取るのが難しかった。

２　協議内容

・色からの発想もあったのでは？また、組み合わせることで形の見立てが減退しないか？
→形からの発想にこだわったが、自然に組み合わせる活動が進んだ。手立てが必要だった。
・子どもは画用紙をちぎる行為に抵抗を感じるだろうが、“体操”というネーミングがよい。
・創造的な技能に関する評価の仕方と教師側の視点は何か？
→形に対して何を付け加えることができたかが工夫した表現としてとらえたる。
・自分のちぎった紙に限らず使えるようにしていたが、個々の思いは生かされていたのか？
→自分でちぎった紙をもっておいても良かった。グループ活動の課題でもあるが、話し合いや発想を苦手な子への手立てを重視していた。
・場や材料によって活動は変わる。低学年では、より個の活動や思いを深めたい。生活班に限らずグループの形を工夫しても良かった。

３　まとめ

・研究協議を重ね、実践したことが何よりもの成果である。
・『材料・活動の限定』については、何気ない柔らかな指示が不可欠。また、実践を重ねていくことで形以外に他の要素を含めた指導もできていく。カリキュラムの中で計画的な造形的な能力の育成を図る必要がある。
・『グループ活動』については、発想へのつながりとなっていた。子ども同士で多くの価値観に　触れることができる。『説明→比較→生かす』というように答えのない中で言語活動ができるのが、図工の特性である。

提案２　　提案者　梶原　三恵子（足柄上・足柄下地区）

＜研究主題＞ 自分のイメージを持ち、広げ、豊かに表現することを楽しむ子の育成

１　提案概要

（１）　テーマ設定の理由

・活動にスムーズに取り組めない子がいる。そこで実物を示しながら一人ひとりに説明するとともに、友だちとのかかわりあいの中でそれぞれの児童がイメージを持ちやすく、またイメージを広げていけるような製作活動をさせたい。
・学習指導要領の目標から、創造活動の過程で鑑賞活動を繰り返し行い、言語活動を取り入れることで児童のイメージを広げ、つくりだす喜びをより味わわせたい。

（２）　テーマに迫る仮説

友だちの作品から感じとったイメージを言葉で伝え受け取ることで、イメージを広げ、豊かな表現活動ができる。

工夫１：導入での実物提示
工夫２：表現活動のなかでの鑑賞・言語活動（アドバイスタイム、製作過程ごとの鑑賞ポイントの設定、自由に見て話せる雰囲気作り）
工夫３：技能面の指導
工夫４：ふりかえりカードの利用

（３）　授業実践

①　題材名　　そうぞうを広げてつくろう　「あったらいいな、ゆめのぼうし」

第４学年　Ａ表現（２）絵、Ｂ鑑賞（１）

②　題材の目標

・自分の願いをかなえてくれる「ゆめのぼうし」の発想を広げてお話を考え、楽しんで表現する。

・「ゆめのぼうし」をかぶった自分のお話を想像豊かに発想して、表し方を考える。

・友だちとの交流を通して自分の作品を振り返り、表したいものの感じや様子がよく表れるように工夫する。

・自分や友だちの表現のよさ、工夫のよさを感じとり、表現に生かそうとする。

③　学習活動の流れ

アイデアスケッチの作成 ⇒ 「ゆめぼうし」をかぶった自分のお話を絵にかく ⇒ 鑑賞

（４）　研究の成果と課題

成果・友だちの作品を鑑賞する楽しさが十分に感じられ、自分とは違う表現方法や、自分の作品に対する異なる見方に気づくことができた。

・自分の作品を認めてもらったうれしさや、アドバイスをもらえることそのもののうれしさが学習意欲につながった。

課題・年間指導計画をもっと検討し、児童が必要とする表現方法をある程度事前に習熟できるようにする必要がある。

・アドバイスタイムにもらえるアドバイスの数にばらつきが出てしまった。

・振り返りカードの活用方法について考えていきたい。

２　協議内容

・作品づくりに本人の思いが生きる鑑賞・意見が言語活動の充実につながる。

・表現と鑑賞が一体となった学習になっていた。

・導入で実物を見せるよりも、話を作るなどの工夫があっても良い。

・もっとこだわりをもった絵にするためには、形・色・場面を意識させたい。

・アイデアスケッチには、①帽子の色や形②帽子によって夢をかなえた自分という、２つのハードルがあった。②を追求した作品であって欲しいが、その点でスケッチと変わってきた子どもの様子などを教えて欲しい。

→アイデアスケッチに直接書き足していく様子が見られた。

３　まとめ

・イメージをもたせる工夫があった。（導入の例示、アイデアスケッチ、アドバイスタイム）

・友だちの意見に流されすぎない指導が必要。

・年間指導計画の充実を図り、絵や立体・工作を適切に扱うことを確認して欲しい。

・先生と子どもの会話の必要性も再確認したい。

４　グループ協議・報告

（１）　言語活動の充実について

・目的ではなく手段であり、学習活動の中に、教師と子ども、又は子ども同士が対話する場

面を明確に位置づけることが大切である。【１班】
・話し合いや発表の場面だけでなく、つぶやきや子ども同士のおしゃべりの内容を拾うことも大切である。【２班】
・普段の子どものやりとりを聴き取ることも大切である。その為に、場の工夫や共感できる雰囲気作りなどが求められる。【３班】
・言語活動は鑑賞の時間だけではない。例えば、導入の段階でアイディアを出し合うと、作品のイメージを膨らますことができる。【４班】
・アドバイスカードの活用は有効的であった。
・個を生かしながら集団（全体）を生かす話し合いのあり方には、グループ編成や場の設定の工夫が求められる。【５班】
・子どもたちは相互評価のような言葉かけを自然に行っている。その結果、思いが高まり、次の活動への意欲につながる。子ども同士のさりげないやりとりを大事にしていきたい。【６班】

（２）　新学習指導要領に沿った年間指導計画の作成について
・鑑賞が形式的にならないように、重きを置いたり、話し合い程度にしたり、年間を見通した位置づけの工夫が必要である。【１班】
・子どもの興味、能力を深める為に、技法、材料、用具の扱い方の系統性を見直すことが重要である。【２班】
・横須賀市では『黒表紙』と称される題材事例集があり、約 50 年前から取組を続けている。【３班】
・全ての学習時間の中に表現と鑑賞が一体となった活動を取り入れていくことが望ましい。【４班】
・教科書に準拠した年間指導計画を作成している学校が多いのが実態だが、地域や各学校の特色を盛り込んだ形にできるとよい。【５班】
・横浜市では、ベースとなるカリキュラムをもとに、自分の学級の実態や子どもの生活に根ざした題材を選んだり工夫したりしながら年間指導計画を作成している。学年で話し合う時間は取れるが、学校全体で検討する時間を取るのは難しいのが現状である。【６班】

５　まとめ

図画工作にしかできない言語活動がある。発想や構想の能力（言語活動）と鑑賞活動のバランスの良いカリキュラムを作成することが大切である。子どもたちは、日常の会話の中で自然に言語活動を行っている。そこから発信される子どもたちの自然な発想や思考を大切にしていきたい。また、子どもは、言葉を返さなくとも、友だちの作品を目で追いかけるなど何らかの反応を示しているものである。より子どもの視点に立った指導の工夫をしていきたい。

今後、授業を見直す上で大切なことは、

①　子どもが発信している自然な言語活動を大切にすること。
②　題材の目標を明確にし、どこにどのように言語活動を入れるとより効果的か検討すること。
③　指導計画を実践した後、その成果と課題を検証する、見直す、確認する作業を繰り返すことにより、より深まりのあるカリキュラムにしていくことが大切である。